

法隆寺金堂の内陣に描かれた壁画は、世界の仏教美術の至宝として知られています。この金堂壁画が昭和 24 年の火災で失われたことは昭和史の一つの惨事として記憶されています。法隆寺は最も近いところにある、悠久の歴史と美術の王国。今回はこの法隆寺金堂壁画の謎を描いてみました。



## 1. 法隆寺金堂壁画再現

世界的に有名な法隆寺金堂壁画大小 12 面は、昭和 24 年 1 月 26 日の金堂火災で焼損の災禍に遭った。その後 29 年に金堂は修理再建されたが、焼損壁画は収蔵庫に収められ、金堂内部は白壁のままであった。

昭和 42 年春、壁画再現事業が開始され、昭和の始めに撮影された原寸大のガラス乾板の原版から転写した特殊な和紙に、直接彩色する方法で、安田鞞彦、前田青邨両画伯ら総勢 14 名の日本画家による「再現壁画」は 43 年 2 月に完成、パネル額装して金堂外陣壁面に取り付けられて、20 年ぶりに蘇ったのである。

## 2. 法隆寺から長安へ

聖徳太子が建立したと伝えられる法隆寺が、正史の日本書紀に登場するのはただ一度、天智 9 年(670)に、法隆寺が火災によって一舎も残らず消失したと伝えるだけである。別の資料には和銅元年(708)に法隆寺が造立されたと書かれているが、書紀の信憑性を巡って、法隆寺の再建、非再建は歴史の大きな謎であった。

ところが昭和 14 年の発掘調査で、現法隆寺の敷地内に書紀に記載された火災記録と一致すると思われる若草伽藍が発見され、再建説が主流になった。

和銅元年の再建説を信じると、金堂壁画は 7 世紀の末か 8 世紀初頭の白鳳時代に描かれたということになる。

『金堂壁画は、「鉄線描」と呼ばれる、輪郭線をクッキリと描く新しい絵画技法。法隆寺壁画が白鳳時代に描かれたとすると、その技法は遣唐使の中の絵師が唐の都から持ち帰ったと考えるのが自然だろう。当時の長安の寺々にはそのような壁画が描かれていた』と、壁画再現に参加した日本画家の平山郁夫氏が語る。

当時の長安の寺々に描かれていた壁画、それを書いた絵師として唐朝三大画家の一人、「蔚遲乙僧」という人物があげられる。しかし残念ながら、彼が描いた仏画がどのようなものか、今それを見ることは出来ない。

唐の時代が終るころ、第 15 代皇帝・武宗の会昌 5 年(845)、中国全土に仏教を排斥する、いわゆる「会昌の廃仏」と言われる嵐が吹き荒れ、当時の長安の仏寺は、今日の西安に一寺も残されていないのである。

『蔚遲乙僧、西国の人なり。善く仏像を画き、当時名をほしいままにす』

唐の末期に著された「歴代名画記」に紹介された記事によると、彼の画法は「屈鉄線」と呼ばれ、まるで釘で刻んだような輪郭線に特徴があったという。

『西域、鬼神、奇形・異貌を描いたら、中華に継ぐものマレなり。また静かで清らかな思考・独特な描法と筆使いは、気骨正しく、作品には高い風格がある』

彼の画く仏や菩薩の顔は、西域の民のような筋の通った高い鼻や、切れ長の大きな目に特徴があったという。またその作品には高い風格があったという。

それはまさに法隆寺壁画に残された仏の顔や、菩薩の表情であった。しかし「屈鉄線」と呼ばれる画法は、果たして金堂壁画の「鉄線描」と同じなのだろうか。

### 3. 長安から敦煌へ

中国全土に吹き荒れた会昌の廃仏の嵐も及ばなかったところがある。西域の仏教都「敦煌」である。その頃、敦煌はチベット系民族・吐蕃（とばん）の支配化にあり、奇跡的に廃仏の難を免れていた。そして、この敦煌で平山郁夫氏は、法隆寺壁画の源流ともいべき壁画に出逢うのである。

『昭和六十二年（1987）の訪問のとき、220窟東口上部の小壁を、ふと見て私は息を飲んだ。小振りではあるが、三尊仏が二組描かれていた。まるで描かれたばかりのような新鮮な色彩である。輪郭線は朱も鮮やかであり、身体の肌色も明るい。衣の緑青や、朱の色も鮮明である。指先がぐっと反り返って張りのある形が法隆寺壁画の仏たちと同様であった』

220窟には貞観16年（642）と供養銘があり、法隆寺壁画が画かれた時期と一致する。しかし、敦煌壁画を描いたのは、どのような絵師だろうか。

### 4. 敦煌からダンダンウィルクへ

中国ウイグル自治区、西域南道のオアシス都市ホータン、その近郊のダンダンウィルクの遺跡で、日中合同調査団が如来像の壁画を発見したのは2002年のことである。そのあまりの美しさに、調査団は「西域のモナリザ」と名づけた。

如来の輪郭は、鉄線を曲げたような、強く、しかも乱れない線で縁取られ、それはまさに「歴代名画記」に記された蔚遲乙僧の画法の通りだったのである。

ダンダンウィルクはホータンの北東120キロ、そこは古代ホータン王国の仏教寺院が建ち並んでいたところであった。

『これは唐の時代、広く中国に影響を与えた、蔚遲派の作品に間違いありません。風格、明暗の付け方、人体表現、そして線の描き方、すべてがそれを著しています。これは仏教美術史の貴重な発見です』

日中合同調査団に同行した、NHKの取材チームはこのように伝えた。



（西域のモナリザ）

ホータンは紀元前後の頃から、千年もの間存在した仏教王国、「蔚遲」はその王族の名前だった。仏や菩薩のように人を超越した存在を描くための描法といわれる蔚遲派の技法は、古代ホータン王国から、敦煌、長安、そして東の法隆寺へと遙かな道を繋いでいったのである。

『日本から遣唐使使節が長安の都を訪ねた時、西域の仏教国の絵師たちも居たのであろう。法隆寺壁画の課題をもった日本の画工もその中の一人だったに違いない。そして、長安の工房で、それぞれ下図を研究したものが、西の敦煌へ、東の奈良へと分かれて行ったのだろう』(平山郁夫氏)

## 5. 白鳳時代、法隆寺が再建された時代の物語へ

めざす金堂は梁をとおさずに建てようとしている。内陣の周りいっぱい描く壁画のためにそうするほかはない。梁のかわりに入側柱で重層の瓦屋根の重みを持ちこたえなければならない。

再建斑鳩寺の木工匠(こたくみのたくみ)の佐彦は、仕方(設計図)の寸法を朱筆で木の地肌書き、墨汁の糸をはじいて直線を引いていく。四角の材木をまず八角形に、さらに十六角形に削り、チョウナで角を落とすと円柱らしい形になった。

金堂内陣に、仏浄土を描くことを進言したのは、黄文直(きぶみのあたい)である。「唐の都城内の寺々には例外なく壁画が描かれ、堂内の絵の前で、参詣に訪れた人々に、寺僧が絵どきに合わせて説法をするのです」

黄文直は高麗風の陵墓の壁画を得意とした黄文本実の孫で、若い絵師として遣唐使の一員に加わり、唐土の最新の画風を学んできていた。

「画題は四方四仏の浄土変相図や、生前・前世の釈迦物語、経文や説話に現れる有名場面などいろいろで、描き方はさまざまですが、なかでも鉄線描きといわれる西域出身の絵師の壁画が多く見られたようでございます」

木工の佐彦は同じ物作りの感性から、この黄文直の構想に深い共感を覚え、壁画のために堂内の構造が制約されることも厭わず、直に協力してきた。

内陣の柱十八本のすべてに佐彦は心ゆくまでヤリガンナで仕上げを終えた。一点の目落としもない自信がもてた。

「この柱は不思議な形ですね。焼けた厩戸の金堂の柱もこうだったのでしょうか。このように胴の部分が膨らんでいる柱は、わたくしの国ではありませんでした」

後ろから声を掛けられて、佐彦が振り返ると真善姫が立っていた。彼女は亡命百済王族の娘だが、彼女が渡来した時には既に斑鳩寺はなかったのである。

「いいえ、これは初めての試みです。此度は内陣の壁に仏画が描かれるということで、柱が目立たないように、胴張りを自然ななだらかさにしたのです」

そう答えた佐彦は、斑鳩寺の焼け跡で初めて真善姫を見た日のことを思い出していた。彼女は崩れ落ちた旧金堂の基壇に立って、道行く人に呼びかけていた。

「仏法を滅ぼしてはなりません。唐と新羅の軍勢によって百済の仏法は滅びまし

たが、百済の仏たちは海を越えて、この国へやってきたのです。斑鳩は仏法の最後の土地なのです。厩戸の斑鳩寺をこの地に再建するのです。五重の塔を高く上げるのです。厩戸皇子の尊い精神を思い出すのです」

目にも綾な薄衣を細身にまとして呼びかける真善姫を、佐彦は百済観音の化身と思った。百済観音が彼女の姿を借りて、斑鳩寺の再建を訴えていると思った。そして彼女のために、いや百済観音のために力を尽くしたいと思ったのである。

黄文の画師の工房では佐彦たちが運び入れた天井板に花柄を入れる仕事に取り掛かっていた。格子のあいま、あいまに一つずつ、蓮の花弁を描く。はたで見えても、随分根と手間のかかる仕事だ。「彼らに素晴らしい壁画を描かせてやらねばならない」と、佐彦はいつもここへ来て思った。

柱立ての日は空が晴れ上がった。抑えきれぬ喜びと活気が寺内に感じられる。「焼け跡にもう一度寺を」という人々の願いが、今実現しようとしているのだ。

南面する中心の柱を基壇に立てるための綱を、木工司の佐彦らが柱の上部に結びつけた。五本の布は赤、黄、緑、白、青の五色に染め分けられている。

やがてドラの音を先頭に、笛、鉦、太鼓、琵琶、箏（ひちりき）などを奏でる典礼僧の一同、衣冠束帯の飛鳥朝廷の勅旨、紫や黄や緋の法衣をひるがえす大官諸寺の僧正たち、さらに今來の渡來人たちが続く。

やがて、勅旨が法隆寺再建をことほぐ天皇の詔（みことのり）を読み終えると、待機していた佐彦らが、心柱を肩にかついで壇上へあがった。柱の布綱を木工たちが四方から引っ張り、二、三人の木工司が柱の根元を抱きかかえて磁石のくぼみへにじり寄せる。柱は立った。斑鳩寺は新しい歴史の一步を踏み出したのである。

柱立ての数日後、佐彦は真善姫に呼ばれて、中宮寺に行った。彼女は池のほとりで佐彦を迎えると、水の澱んだ池を見ながら言った。

「池には蓮の花が咲いていました。それは美しかったです」

佐彦は驚いて池の中を見たが、長い間、人の住まなくなった中宮寺は荒れて、池には花など咲いていなかった。

「ぼんぼんとかすかな音を聞くと、幼い私は寢床でじっとしておれなくて、こっそり一人で庭へ出ました。池のあちこちで蓮の花が開いて……、私はなかば夢見心地で、弥勒の浄土へ化生したように思いました」

佐彦は真善姫の姿が次第に観音菩薩に変わっていくような気がした。いや間違いない、彼女は百済観音に代わりながら、佐彦に語りかけていた。

「佐彦、新しい斑鳩寺の真柱は建ちましたか」 佐彦が「はい」と答えると

「そうですか、私はそこであなた方を見守っていきましょう」

そう言うと、真善姫の姿は静かに池のほとりから消えて行った。